

「日本植民地帝国の経済史的研究」三部作の周辺

山本有造

私が研究のメイン・フィールドとした日本植民地帝国の

経済史的分析については、三つの論集を出した。日本の

「公式植民地」を対象とした『日本植民地経済史研究』（一

九九二年）、主に「満洲国」を取り扱った『満洲国』経済

史研究』（二〇〇三年）、そして「大東亜戦争」期を分析し

た『大東亜共栄圏』経済史研究』（二〇一一年）である。

これらによって、時期的には日清戦争にはじまる形成期か

ら太平洋戦争の敗戦による終末期にいたる期間、そして領

域的には「公式植民地」から「非公式植民地」そして「戦

時占領地」までの拡がりを、「数量経済史」的方法でカ

ヴァーする「日本植民地帝国」の経済史的展開を纏めるこ

とができた。

山本の三部作などといわれてみると、全体計画が早くか

らあつて順次準備よく進行したように思われるかもしれない。

しかし実は、あちらで迷いこちらで躓き、ヨロヨロと

歩みを進めた結果であつて、とても威張れるようなもので

はない。ウロウロよろよろの歩みも、日が経つにつれて忘

れていく。折角「歴史随想」という場をいただくことがで

きたのを機会に、忘れかけていることを思い出しながら、

記録しておくことにしたい。とても随想らしい随想にはな

らないことを、予めお許しいただきたい。

一 前史

私が経済史を勉強しようと思つて堀江保蔵先生の門を敲き、京都大学大学院・経済学研究所・修士課程に入ったのは一九六五年であつた。正直に言えば、課題に何の当ても、何の抱負もないヤクザな院生であつた。たまたま松井清先生の「後進国開発論」の演習に出席したことがあるキッカケとなつた。「経済開発と資本調達」が関心を引いていた時代、報告の順番が廻つてきて無理やり捻り出したテーマが、「日本外資導入史」すなわち「日本の経済発展における資本輸入の役割」であつた。日本の歴史統計をひっくり返して勉強するうちに、本格的に日本の資本移動を分析するには、これまでのようにストック・データだけに頼るのではなく、フロー・データを準備する必要があることになつた。

日本の国際収支統計は思ったより良く揃つていた。明治後期から戦時期にいたる「日本帝国」領域については、戦後に匹敵する良質の政府統計が存在した。ただ、明治維新から戦後までを俯瞰して分析しようとする場合、問題の第一は、明治前期の統計をどう作成するか、第二は「日本本

土」領域に統一した長期統計をいかに作るかであつた。

前者については幸い（あるいは残念ながら）、すでに建元正弘先生が（馬場正雄先生との共同研究で）推計作業を進めておられ、ご教示を得るとともに、詳細なデータも頂くことができた。結局、修士課程の二年と京都大学・人文科学研究所の助手になつてからの二年、実に四年近くをもつぱら後者の推計作業に費やすことになつた。私の処女論文は、一九六九年にようやく刊行された「国際収支統計の長期総合化について——明治元年（一八六八）〜昭和十一年（一九三六）——」というタイトルの、実に愛想のない作品であつた。

幸いであつたのは、飯沼二郎先生が（河野健二先生と共同で）主宰された研究所の共同研究会「世界資本主義」班の場を通じて角山榮先生に出会い、教示を得たことであつた。何をやっているのか分からない後輩を哀れまれたのであろう。ある日、「君は何がやりたいのかネ」とのご下問があつた。実は、いま一橋大学・経済研究所で大川一司先生が主宰されて進行中の「長期経済統計」プロジェクト（LTESプロジェクト）のような仕事がしたいのです。それなら行つて教えてもらつてきたらいいじゃないか。眼か

らウロコが落ちた。早速、しかし恐る恐る大川先生に連絡をとり、日本学術振興会研究助成の流動研究員という制度に応募して、一九六九年度の一年間を一橋大学・経済研究所に内地留学することができた。梅村又次先生の知己を得たことをはじめとして、この一年に得たものの豊かさについては、また別に語らなければならない。

形として具体化した最大の成果は、「長期経済統計」シリーズの最終巻として追加されて、第一四巻に収められることになった(山澤逸平氏との共著)『貿易と国際収支』(一九七九年)を書くことが出来たことであつた。この巻が追加されたのは、サイモン・クズネッツ先生がL T E Sシリーズに「貿易と国際収支」の巻がないことを指摘された結果であつたとき。これが私の最初の著書になった。

二 日本植民地経済史研究

日本の国際収支統計の問題の第二に挙げた、「帝国」領域のデータを「本土」領域に調整するという作業は、「内地」と「外地」を分離することを意味する。細かいことを省略すれば、日本の二大植民地であつた朝鮮と台湾の「域外収支」をそれぞれ推計することにほぼ等しい。こうして、

日本の国際収支推計作業の副産物のようにして生まれた論文が、「植民地下朝鮮・台湾の域外収支(朝鮮篇)」「(一九七二年)と「同(台湾篇)」「(一九七五年)であつた。

これまた幸いであつたのは、一九七四年から溝口敏行先生が(石川滋先生以来の先行プロジェクトを受け継ぎつつそれを拡大して)新たに組織された「旧植民地プロジェクト」に、お誘いをうけたことであつた。これは、一言でいえばL T E Sプロジェクトの植民地版であつて、旧日本植民地の経済統計を国民経済計算の枠組みにしたがって整理し、今後の分析研究の基礎を築こうとするものであつた。ここで、統一的で包括的なマクロデータの在り方を勉強したことが、私の植民地研究の血となり肉となつた。

日本の公式植民地の統治構造を俯瞰した「概論篇」を先頭に置き、植民地朝鮮および台湾の生産力、資本形成、国際収支、植民地投資の研究を「分析篇」とし、国際収支(域外収支)に関する山本推計を「統計篇」に付加して、『日本植民地経済史研究』(一九九二年)となつた。これが私の単著の第一号であつた。助手に採用されてから実に二五年、神戸商科大学を経て人文科学研究所に戻ってからでもすでに一〇年が経つていた。ミネルヴァ書房から名古屋

大学出版社に移られた編集者・後藤郁夫氏の「挑発と媒介」を思い起こさざるをえない。

本書は多くの同学の士から懇切な書評を受けた。なかでも、奥和義氏の一文「本書で明示されているわけではないが、第三章にみられる「旧日本植民地帝国」という把握が著者の問題意識の底にあると思われる」という指摘は、我が意を得るものであった。帝国とは何か。日本植民地帝国とは何か。これがその後の歩みを方向付けることになった。ここで付け加えておけば、日本の国際収支推計への関心から間接的に生まれた副産物が、私のもうひとつの研究フィールドとなった「円」の研究であった。

日本の国際収支推計作業における問題点の第一が建元推計で大体の決着が着いたことはすでに触れた。ただ、最初に私が試みようとした計画では、一八五九（安政六）年の横浜・長崎・箱館開港から一九〇一（明治三四）年までの国際収支表を作ろうと考えた。幕末も加えたかったのは、開港による貿易の拡大から、賠償金の支払い、武器・艦船の買入れ、などなど、幕末の政治経済史を彩る対外諸事件の実態を、国際収支分析を通じて俯瞰的に考察できると考えたからであった。しかし取り掛かってみてすぐに分かっ

たことは、「両」と「円」の関係について、これらと外貨（洋銀）との関係について、要するに当時の貨幣状況の実態がよく分からなければ統計数字を扱うことが出来ないということであった。こうして一時、幕末から明治十年代にいたる貨幣状況（つまり明治四年「新貨条例」による「円」の誕生とその背景）にのめり込むことになった。

「数量経済史研究会」における報告や討論に鍛えられて論文をいくつか書き、『両から円へ―幕末・明治前期貨幣問題研究―』を纏めたのは一九九四年であった。「数量経済史研究会」から受けた恩恵については、これまた別に語らなければならない。

三 「満洲国」経済史研究

私をはじめ「満洲」に触れたのは、神戸商科大学のワーキング・ペーパーに書いた「対「満洲国」投資額に関する若干の推計資料について」（一九七七年）であった。しかしそれから長い道が続いた。

「満洲国」の数量史分析にふさわしいどのような資料を、どこで得られるのか。その突破口を開いてくれたのが、「石田興平文庫」と「張公権文書」との出会いであった。

小野一一郎先生の示唆によって名著『満洲における植民地経済の史的展開』（一九六四年）の著者である石田興平先生のご自宅を（小野先生、松野周治氏と一緒）訪ね、これが契機となって満洲関係金融資料の一大コレクションを私がお預かりすることになった。また、一九七九年度の公立学校助成による在外研究の場にスタンフォード大学フーバー研究所を選び、司書室で雑談中に受けた中村義先生の思わぬ一言がキッカケとなって、Chan Chia-ao Collection いわゆる張公権の文書を「発見」することになった。これについては、旧満洲中央銀行OBの支援とアジア経済研究所の助成を得て、井村哲郎氏とフーバー研究所・文書室を一九八六年に再訪することができ、全体のマイクロ化と目録化を果たして日本に持ち帰った。それからしばらくは、これらの身を噛み、骨をしゃぶりつくすことに日を費やすことになった。

「満洲国」攻略のもうひとつの突破口が、人文科学研究所における共同研究の一環として主宰した、共同研究会「満洲国」の研究」班の活動であった。一九八六年度を準備会にあて、一九八七年度から九二年度までつづいたこの研究会は、東京に刺激をうけて「満洲」研究に取りかかっ

た関西の若手研究者を、タイミング良く結集する場を提供することになった。日本史、中国史、アジア史、また政治、経済、文学、建築、書誌という多方面の専門家が集まり、しかし焦点を「満洲国十四年史」に絞ることで、共同研究としての熱気を保つことに成功した。共同研究班の報告書『満洲国』の研究』（一九九三年、新版一九九五年）を、河野健二先生にお褒め頂いたうれしさは忘れられない。また多くの班員がこの研究会の成果を単著にまとめ、高い評価を受けていることは、会を組織した者として誠に喜ばしい。そうしたなかで、私の『満洲国』経済史研究』（二〇〇三年）は、京都大学を定年退職するにあたっての卒業論文であり、またかつての研究班の仲間たちへの遅ればせながらの報告書のつもりで書いた。

自画自賛を承知で言えば、『満洲国』経済史研究』は全体としてなかなか良くできた書物になった。基礎データとして国民所得、産業生産指数、国際収支の三本の統計を準備し、主に生産指数統計による国内経済分析と、国際収支統計による対外経済分析をセットにして第二部「満洲国」経済のマクロ的分析」とし、満洲と特殊な関係にあった関東州および朝鮮との交易を論じた第三部「満洲」周

辺交易論」を加えて、本書全体の軸になる「分析篇」とした。前著のように統計を「つくる」苦勞は少なかつたが、普通はあるとは思いつかない統計データを、あると信じて徹底して「さがす」ことには少なからず苦勞をした。その過程と結果を二章に整理して第四部「統計資料解題」とした。それらに、満洲国および満洲国経済に関する叙述的総括を第一部「満洲国」概論」にまとめて、前著における「概論篇」、「分析篇」、「統計篇」の三部編成を踏襲した。

本書につき二度にわたって書評の勞を取られた金子文夫氏には深く感謝する。しかし「本体部分が薄いという印象を拭いきれない」という総評は、今もって受け入れがたい。この間に、「満洲国」班につづく人文研の共同研究会として、「帝国の研究」班、「満洲 記憶と歴史」班、等を主宰し、それぞれの研究報告書を刊行したが、それらについてここでは省略する。

四 「大東亜共栄圏」経済史研究

二〇〇四年の春に京都大学を定年退職して、中部大学・人文学部に新設される歴史地理学科にお誘いを受けた。研究所暮らしが長かつたために、講義の準備や入試問題の作

成のために時間を取られた。「満洲国」を書き終えるころから、三部作の構想を持つようになっていたが、あれこれするうちにたちまち三年がすぎた。氣を取り直して学部紀要（「中部大学人文学部研究論集」）に書いた論文が「大東亜共栄圏」交易論」（二〇〇八年）で、それから毎年一本は紀要に書くことにして、どうやら形をなしはじめた。

それにしても、いわゆる「南方圏」を含む「大東亜共栄圏」という誠に広大で、多様な経済の総体を、しかも戦時下という特殊状況を踏まえて数量経済史的に分析するなどということとは可能であろうか。

結局、『大東亜共栄圏』経済史研究』（二〇一二年）で採用した方法は、物量データによる貿易（交易）分析を中心に据え、これを国際収支（域外収支）と金融システムとの解析で補完するという、誠に限定的で代わり映えのしないものになった。そして結論もまた、戦時の物資収奪が大量の不換紙幣の発行（と植民地側の「円」債権の蓄積）により支えられたこと、その結果として中心から周辺へと戦時インフレが波状的に拡がり、最周辺部の「南方圏」における暴力的収奪の破綻が「大東亜共栄圏」の崩壊に至ったという、ある意味では常識的な指摘に止まった。

ただ「大東亜共栄圏」期において最も暴力的な様相を呈したこの収奪システムは、「公式植民地」においても「満洲国」においてもその初期から同様に機能した、ある意味では「日本植民地帝国」を特長づける一貫したシステムであったということが出来る。三部作を通じてのひとつの主張がここに纏められている。

数量経済史に関心のない読者には、叙述史としての第一章「日本植民地帝国の展開と構造」が少しは役に立つであろう。私自身にとっても、この章によって最終期から見た日本植民地帝国の構造および展開を一種の「模式図」のように示すことにより、いわば三部作全体の総序章が描けたことに満足している。

倉沢愛子氏がその書評において指摘されたように、「たとえば甲地域「陸軍担当の軍占領地」をすべてまとめて論じるのではなく、さらに地域ごとに分類してデータを詳細に分析し、そこから何が見えてくるのかを提示して欲しかった」という感想は当然であろう。私もそれが行いたかった。しかしそのためには、極めて強力な共同研究会を、多分いくつも続けなければなるまい。そして学界を見渡しても、未だその機運は見えていない。

第一論集では基本データを「つくる」ことにかなり力を注いだ。第二論集では「さがす」ことに時間をついやした。ここ第三論集では、すでにある統計のなから単に「えらぶ」ことしか行わなかった。数量経済史を標榜しながら、データ・エスティメーションに何ら貢献していないことが悔やまれる。最終章の第九章「南方圏」国民所得の推計についてはその悔しさの表出であるが、「この部分はいささか唐突な感じが免れない」との評を頂いてしまった。これまでの「概論篇」「分析篇」「統計篇」の三部構成に拘ったツケが、ここでまわってきたといつてよいであろう。

五 後史

二度目の定年で中部大学を去るに当たって頭を悩ませたのは、研究室に溜め込んだ書籍の処分であった。「満洲」関係コレクションは、一度目の定年に際して石田文庫を滋賀大学・経済経営研究所に引き取っていただき「石田記念（満洲）文庫」と命名したものに、新たに加えていただいた講座・全集類の一部は趙寛子氏のお世話でソウル大学・日本研究所に寄贈した。3LDKの自宅に引き取れるわずかなものを除いて、この際その他すべての書籍・資料を整理

することに、京都の古書店に一切合切を引き取ってもらった。京都―神戸―京都―名古屋と持ち運び、身体に馴染んだ書物が消えてガラんとした研究室にたまたずんで、しばらくはボンヤリした。

もう数量経済史はできない。自宅に残った書物の背を眺めながら、「幕末・開港史」に本卦帰りすることを考えはじめた。

幕末・維新期の貨幣史については先に述べた。もうひとつ、私に幕末・維新史の道を開いてくれた契機は、かつて人文研で坂田吉雄先生が主宰された共同研究会「世界史における明治維新」班に助手として参加を許され、基礎訓練を受けたことである。この会は、主宰者が吉田光邦先生に引継がれて、公式・非公式の豊かな楽しい研究会が続いた。ここで私が選んだテーマは、「お雇い」を中心とする来日外国人の物語で、坂田班の報告書には「ホームズ船長の冒険」(一九七二年)を書き、吉田班の報告書には「三人ガワー」(一九八五年)を書いた。その後は、公私多忙にまぎれてこの方面は棚上げになったが、時に思い出している気になるテーマが二つあった。

ひとつは、幕末に来日した鉾山技師エラスマス・ガワー

を中心とする三兄弟の出自と生涯の物語であった。一九九二年に文部省在外研究費(短期)の順番が廻ってきた時には、西欧を少し歩き回ったことも理由になって、「お雇い」鉾山技師エラスマス・ガワーの研究」をテーマにし、短期間ながらイギリス、フランス、イタリアをめぐってかなり熱心に資料集めを行った。その後もあいかわらず多忙にまぎれて、この方面は休業が続いたが、資料は整理して自宅の書庫の隅に置いておいた。ある日突然思い立って資料類を掘り起こし、記憶を総動員して書いたのが『お雇い』鉾山技師エラスマス・ガワーとその兄弟』であった。これは、幸いなことに中部大学ブックシリーズ「アクタ」の一冊に採用され、美しいブックレットになった(二〇二二年)。

気にかかっていたもうひとつは、ヴァンザント氏の好著(Howard F. Van Zandt, *Pioneer American Merchants in Japan*, Lotus Press, 1980)の翻訳である。ペリーとハリスのはざま、一八五五(安政二)年の春、日本で商売をするつもりでカロライン・フート号という小さな帆船を雇い、カリフォルニアから下田・箱館にやって来たバイオニア・アメリカン・マーチャントの物語は、波乱万丈まことに面白い。と

にかく翻訳原稿はつくったが、時を失して著者にも出版社にも連絡が取れず、宙に浮いてしまった。そこで、はじめは解説を書くつもりで準備した日本側の資料などが溜まってきたので、興に乗っていくつかの論文を書いた。これらを集めてもうひとつのブックレットにしたのが、最近著『カロライン・フート号が来た——ペリーとハリスのはざままで——』（二〇一七年）である。残念ながら、翻訳原稿はまだ篋底に眠っている。

ここ数年掛りで、ひとまずの気がかりは解消した。今は、すっかり現代史離れ、浮世離れした頭をひねって、これからの行き先を考えている。

〔関係文献略目録（著者名五十音順）〕

奥 和義（書評） 山本有造著『日本植民地経済史研究』

（山口大学経済学会）『山口経済学雑誌』第四二巻第五・六号、一九九五年三月。

金子文夫（書評） 山本有造著『満洲国』経済史研究』（政治経済学・経済史学会）『歴史と経済』第一八八号、二〇〇五年七月。

金子文夫（書評） 山本有造著『満洲国』経済史研究』（植

民地文化学会）『植民地文化研究』第三号、二〇〇四年七月。

倉沢愛子（書評） 山本有造著『大東亜共栄圏』経済史研究』（日本植民地研究会）『日本植民地研究』第二五号、二〇一三年六月。

橘 宗吾『学術書の編集者』慶應義塾大学出版会、二〇一六年。

山本有造「張公権ならびに「張公権文書」について」アジア経済研究所『張公権文書』目録一九八六年。

山本有造（歴史随想）石田興平博士と石田文庫（大阪経済大学日本経済史研究所）『経済史研究』第七号、二〇〇三年三月。

山本有造（新刊紹介）『お雇い』鉾山技師エラスマス・ガワとその兄弟』（中部大学広報誌）『アンテナ ANTENNA』第一一三号、二〇一二年二月。

（やまもと ゆうぞう・京都大学名誉教授）

